

指導主事講話「東日本大震災から考える」

後期の所内研修で予定されている指導主事の講話は3回。第1回目は、上原義仁指導主事によって1月8日(木)に、「東日本大震災から考える」と題し、講話が行なわれました。

2011年3月の東日本大震災発生当時の学校における対応と「津波警報時の対応と命を結びつけて子ども達に考えさせるのは今しかない」と考えて、その3日後に行った子ども達への「自分自身の命を守るのは自分自身だ」ということを伝える特別授業の内容等に基づいた、お話でした。

また、その後自分の足で被災地を訪れることで知ることのできた復旧の様子と震災当時の対応の具体的な事例をあげ、写真や資料をもとに具体的に意識できるようまとめ、自然災害時における教員のあり方を考えさせる講話でした。

【指導主事講話の主な内容】

- 1 はじめに
- 2 2011年3月11日(金)東日本大震災(東北地方太平洋沖地震)発生。そのとき、〇〇小学校では
 - (1) 津波警報の情報入手の状況
 - (2) 避難。そのとき子どもは? 教師は? 避難訓練の大切さ。
 - (3) 児童下校。下校した児童は? 大人は?
- 3 3月14日(月)特別授業
 - (1) 津波警報時の対応について考えさせるには、今しかない。
 - (2) 3月11日の自分の行動を、被災地の状況や被害者のことばから考えさせる。
- 4 被災地を巡って
 - (1) 被災地の今。
 - ① 南三陸町までの交通手段(復旧の状況) ② 仮設商店街 ③ 語り部タクシー
 - (2) 被災時の出来事
 - ① 津波の被害 ② 南三陸町防災庁舎 ③ 大川小学校
 - ④ 七十七銀行女川支店 ⑤ 女川町立病院
 (命が助かった人と失われた人。そのときの行動。鍵を握った人)
- 5 △△小学校の対策
 - (1) 防災教育
 - (2) 避難訓練
 - (3) 危機管理。情報を素早く得るために
 - (4) ライフジャケット
- 6 地震・津波・災害・・・教員として・・・心
 - (1) 防災教育・訓練(現実に行われることを想定して。家庭も巻き込んで)年2回でOKか。
 - (2) 災害時の対応に向けた計画・準備・広報。
 - (3) 災害後の対応。(学校は避難所に。 教師は? 役場は?) 家族の理解。(女川町立病院看護師の例)



写真1 研修の様子①



写真2 研修の様子②

後期教育研究員の感想（研修日誌から）

今日の講話で震災が起こった当日のことが思い出されました。私は育児休暇中であり、自宅のテレビに津波の映像が急に出てきました。リアルタイムだったので、人が乗っているであろう車が流されるシーンや水に埋もれた車の上から子どもを抱えた母親が、側のビルに避難しようとしている場面等、衝撃を受けたことを鮮明に覚えています。震災を受けて、国を挙げての取り組みが行われ、行政や学校現場も防災に対する関心が一気に高まり、その対応がなされてきたと思います。特に、私の勤務する幼稚園は海のすぐ側であり海抜も低く、避難訓練や避難時の職員の対応についても、危機感をもって取り組んできました。

また、私の地域は自主防災組織等にも力を入れています。しかし、時間が過ぎるとその危機感が薄れてきていることも確かです。今日の講話を受けて再び、災害の恐ろしさや防災に対する意識を常に持たなければいけないと考えさせられました。「自分の命を自分で守る」ことができるように、国や行政等、人任せにするのではなく、子ども、親、家族、児童、教師等、国民一人一人がそれぞれの立場でできることを考えていくことも大切ではないかと思えます。幼稚園における取り組みも、継続して力を入れていきたいと思えます。

（稲嶺あゆみ）

大災害が訪れた時、どのような対応をとればよいのか…今日の義仁指導主事の講話は、災害が起こった時に自分ができること、また子どもたちに伝えなければならないことを改めて考えるよい機会となりました。東日本大震災以前も、学級指導や道徳などで阪神淡路大震災のことを取り上げて授業を行ってはいたが、東日本大震災時の津波や建物が壊れている様子をテレビで目の当たりにし、その後の地震に対する見方や授業などでの子どもへの伝え方が変わったと思えます。講話を聴きながら感じたことは、防災マニュアルや訓練の必要性、実際に起こった時のその場の判断の大切さなど、命を守るために自分自身ができることを常に考えることが大切であるということでした。米須小学校は校区内に海もあり、特に津波がきた時の対応をしっかりと考えていかなければならないと思えます。△△小学校の対策を参考にし、どのような対策をすればよいのか、子どもたちと一緒に考えていく機会をつくっていききたいと思えます。

（安座名有里）

2011年3月11日（金）の自分の行動を思い出し、葛藤しました。当時の被害を目の当たりにしながらもどこか他人事のようにとらえていたことを思い出したからです。沖縄への津波到着予想を見ながらもたいしたことないと考えていたことや地域の卒業生のお祝いを無くすわけにはいかないだろうと考えていたこと、さらに下校後の子ども達の安全を守る立場を忘れていたことに対してです。

今日の話を聞いて考えたことは、①安全を守るための計画の周知と指示系統の確認が必要だということ。②大災害が起きたときの行動を家族で話し合うこと。③正確な情報を得ることで確かな行動ができること④災害を直視することでそれに対する対策、対応策を考えられること。⑤教員としてできること、学校施設の開放にたいする手伝いなど意識しておかなくてはならないこと。⑥地域の安全に関心を持つことで自分たちがどのように避難するのか、指示者は誰なのかを知ることができること。自分のこと、家族のこと、地域のこと、これからのことを考える研修になりました。被災なされたみなさまのご冥福をお祈りします。

（勢理客貴之）

義仁指導主事が家族で被災地に行ったというので驚いた。自分は気になるといってもそこまでは行動できなかったと思えます。震災のあった日、先生が教務として対応した話では、自分が同じような立場に立ったとして、どのような対応がとれるだろうかと考えさせられました。ニュースで何度もトップの判断で人命が助かったという話を聞いています。とても重い決断だと思います。語り部タクシーの話から被災地の現状をより理解できました。遺族の心にも深い傷跡が残っています。△△小学校では様々な対策が取られているそうです。自分たちも、教員として児童の安全を守るために想定して避難訓練を行っているが、気構えを持つておくことが必要だと思います。

災害は普段から想定し、準備をしておくことで被害を少なくしたり、命を守ったりすることができると思えます。子ども達にも真剣に対応することや災害の怖さも教えていく必要があると思えました。（比嘉俊雄）

勤務校での実体験に基づいたお話、教務という立場にあったからこそ危機意識も強くあったことと思えます。昨年の台風で、暴風警報が出たからと、早く登校してきた生徒を家に帰したことで、迎えに来た保護者が学校の対応のまずさを指摘したことがありました。保護者に引き渡すまでは学校で生徒の安全を保障してあげなければならなかったのかもしれないかもしれません。津波にあった大川小学校と勤務校との海からの距離を表す地図は、真実味がありました。児童も本当に津波が来たらただごとではなかったと感じたでしょう。ただ何となくその地域に住んではいけないと思えます。地域を知って、災害の際の身の振り方、家族との連携を改めて感じました。自分の子どもを誰かが守ってくれていると信じている自分は、他人の子も同様に守ってあげなければいけないと思えます。ぎりぎりまで非難勧告をし、自分の命を奪われた方、児童が命を落とすような場所であるはずがない学校で、命を落としたたくさんの児童。私は真実と向き合うのが少し臆病な所があります。勇気を持って被災地を訪れる機会をあえてつくった上原指導主事の行動に敬意を表します。家族で訪れたということもあって、きっと思い出深い訪問になったことと思えます。

（古謝栄子）